

サクラソウの教え

西尾市教育長 稲垣 寿

新任校長として勤めた小学校の用務員さんは、葡萄農家で巨峰づくりの名人だった。毎年夏になると、超大粒の種なし巨峰を職員みんなに振舞ってくれた。その用務員さんが、学校で育てているサクラソウは、見たこともない立派さだった。花の色こそ薄いものの、高さは市販品の一・五倍余、幅も二倍近いもので、玄関先に並んだサクラソウの鉢植えは、垣根のように来客を迎えていた。ガーデニングが趣味の職員も、こんなのはどこにも売っていないと驚いていた。

用務員さんに育てるコツを尋ねてみたところ、いちばんの要所は、成長に応じて鉢を大きくするために幾度も植え替えをすることだった。初めから大きな鉢にすれば手間を省けるはずだが、それでは水が行き渡らず、育たないらしい。ちょうどいい大きさの鉢（土の量）だからこそ大きくするというのだ。毎年採れた種から育てているため、花の色も薄まるし、発芽率も高くない。それでも、用務員さんは、何倍も手をかけて毎年育ててきたのである。このサクラソウこそ、学校に何よりふさわしいと誇らしく感じたものだった。

二年前、コロナ禍対応の農業支援事業の二環として、教育委員会の私の机上にもお裾分けをいただいた。コーヒークップに植わった、緑爽やかな二五センチほどの観葉植物には、ヌテレオスペルマム」という名札がついていた。調べてみると、中国南部 台湾原産で、現地では一〇メートルにも達する木の苗らしかった。小笹のような苗は愛らしく、こまめに水をやってくれる同僚もいて、半年もするとコーヒークップでは頭でっかちになった。小学生の時育てたアサガオと理科の授業で学級農園にサツマイモを作った以外、土いじりに興味も経験もなかったが、ふと、あの用務員さんの言葉を思い出し、生まれて初めて鉢と土を買った。このついでとばかりに液体肥料も入手した。今では三つ目の鉢となり、ライムグリーンの葉を広げて窓際を占領した彼は、茎も逞しく木化し、「和咲夫 わさむ」と命名されて二メートル近くになった。

青年教師だった頃、三河の教育界にその名を轟かせた大校長から、教育は花を育てるのと同じだ・・・と諭された記憶がある。当時は大校長のあまりの迫力にビビったため、話の趣旨は頭に入らなかったが、今は分かる気がする。今夏には天井にも届きそうな「和咲夫」を眺めながら、いつか花は咲かないのかなと、手前勝手に期待している。